研究会@東大

2001/03/23

NAKAHARA, Jun

Wenger, E.（1998） Communities of Practice Cambridge University Press,Cambridge Chapter2 Community pp72-85

※このレジュメは、研究会メンバーの興味関心に基づいて再構成されている部分もある。逐語訳ではないので、注意されたい。またこの資料は、研究・学術目的に限り、閲覧を許可する。

０．Ovevire：Practice と Communityの関係

・コミュニティと実践を関連づけるために、３つの dimension を導入する（Fig. 2. 1)。

１．MutualEngagement

２．a JointEnterprise

３．a sharedrepertoire

１ Mutual Engagement (相互の参加、取り組み、関与)

→コミュニティの一貫性のソースとしての実践。実践の第一の特徴は、Mutual Engagement である。

→実践は抽象的な事柄ではなく、人々の活動と、意味の交渉の中にある。

→実践は歴史的な空白 vacum の中に生まれたものではない

→実践は、コミュニティの人々、MutualEngagement の関係の中にある。

→従って、実践のコミュニティの Membership とは、Mutual Engagement のこと。

→ Membership は社会的なカテゴリーではないし、所属でもない。

→これがコミュニティを定義づける。

▲実践のコミュニティとは同じような特徴をもった人々によって規定されない

→コミュニティとは、グループやチームやネットワークの同義語ではない

→実践のコミュニティは、地理的な近似ではない。

１ １ Enabling Engagement

→ MutualEngagement を可能にするのは、実践に他ならない

→ Engagement だけが、Belonging(所属)を定義づける

→ MutualEngagement を実践のコミュニティにするのは、Work が必要である。

→コミュニティを維持（maintainance）する作業は、実践の中に内在的に備わっている。

1. 2. Diversity and partially

→実践のコミュニティには Mutual Engagement が必要であるが、そうであるならば、必然的にコミュニティは均質的なものにはなりえない

ex. クレイム処理係のメンバーの多様性

→年齢も、アスピレーションもみんな異なっている例

→ MutualEngagement は、必然的に Partial(部分的なもの)である

ex. 参加者は皆異なった役割をもっている。MutualEngagement によって、補完しあいながら貢献を行う。(complementary competence、complementary contribution)

ex.クレイム処理係 ：すべてを知るよりも、どうやって助けをもらい与えるかが重要になっている。

1. 3. Mutual Relationship

→ Mutual Engagement は人々の間に関係（relation）をつくりあげる。個人の特徴とか社会的カテゴリーとかいうような抽象的な同質性よりも、ずっとタイトに人々は、結びつく。

（話かわって）

→一般にコミュニティは Positive なものだと思われている。

→（しかし）平和、幸福、調和は実践のコミュニティの必要属性ではない

→コミュニティには、不一致や緊張、矛盾などを必然的に含まれている。

→しかし、それも参加の形態のひとつにかわりはない

→実践のコミュニティはすべてを複雑に含んでいる。

2. Joint Enterprise

→実践はコミュニティを一貫したものに保つためのソースであるが、その２つめの特徴は、JointEnterprise（企て、事業、活動）のための交渉にある。

→ Enterprise

１．交渉のプロセスの結果であり、Mutual Engagement の複雑な結果

２．何かを追求する渦中にあるメンバーによって定義される

３．安定したゴールではなく、参加者の中に Mutual Accountability をつくりだす。

2. 1. Negociated Enterprise

→ MutualEngagement が均質的なものでないのと同様、Enterprise も単純な意味において「同意」というわけではない。

2. 2. An indigenous(局所的な) enterprise

→実践のコミュニティは、自己充足的な存在ではない。それは、より大きなコンテキストの中で発達する。たとえば、歴史的、文化的、制度的な様々な制約とリソースの中で、である。また、コミュニティ内部のリアリティは日ごとに、様々な制約とリソースの中にあるメンバーによって構築されている。

→クレイム処理係は、歴史的発展した職である

→クレイム処理係は、仕事のやりかたをローカルに効率的に構築している

→リソースや必要が実践を形作るにしても、外的なリソースや制約がすべてコミュニティをコントロールする、というのは嘘である。

2. 3. A regime(体制) of mutual accountability

→ Joint Enterprise を交渉してつくりだすことによって、Mutual Accountability(相互責任)が生まれる。

→ Mutual Accountablity が Politics や Standard や goal として、具体化されたとしても、それらはあまり重要ではない。行動の適切さはメンバーの交渉によって、成立する。

→相互責任の体制が確立し、それが statement として明文化されたとしても、重要なのは Statement ではなく、メンバーによる Stantement の「解釈」にある。

→それが experiencedmember になる、ということである

→ Jointenterprise とは process であり、静的な合意ではない。それが、Accountablity の「関係」を生み出していく。

3. Shared repertoire＝community's set of shared resource

→コミュニティが一貫性を保つための、実践の第三の特徴が、sharedrepertoire である。

→メンバー相互のかかわりによって、意味を交渉するためのリソースが生まれる。

→実践のコミュニティの repertoire とは、仕事のルーチンややりかた、言語やストーリーやジェスチャーや、ジャンルや行為やコンセプトをすべて含む。それらは、コミュニティ内部で生産され、採用されたものであり、いまや実践の一部になっている。

→クレイム処理係

・医学用語の特定の使用

・デスクの紙たばの量は、仕事量をあらわす

・席次は人々の関係をあらわす

→このように sharedrepertoire は、非常に heterogeneous なものである。

3. 1. Negotiation : history & ambiguity

→ shared repertoire とは、コミュニティに共有されたリソースのことであり、２つの特徴をもっている

１．repertoire は mutual engagement の歴史を反映している

２．repertoire は元来多義的（ambiguity）である

3. 2. Resource of mutual engagement

→ repertoire が多義的（＝ open-ended で、新しい意味の生成につながる）であるが故に、協調やコミュニケーションが可能になる。

→意味交渉のリソースである。

4. Negociating meaning in practice

→人々の間に共有された実践は、それ自体 Harmony でもなければ、collaboration でもない
→実践のコミュニティの居所的な一貫性は、強さも弱さもあわせもっている
→局所的に実践が生み出されるとき、実践のコミュニティは創造的な場にもなりえるし、失敗も生み出されることがある。
→実践のコミュニティは、それ自体有益なものでも、有害なものでもない

5. Jun Note:

Wenger のねらったこと
・反実体論の展開、関係論的視点の導入
・コミュニティをめぐる、Catch All、予定調和的論の払拭
　→実践とコミュニティの間にあるものを、もう少しミクロにみていくために、３つの次元を導入した。

情報教育への示唆
・仲良し主義は協同学習をダメにする
　→アカウンタビリティと joint enterprise